飼料価格高騰に係る対策について（肉用牛肥育）

目指すのは

飼料ロスの低減
飼料効率の向上
生産性の向上（事故率低減）

日常の管理において、どこでどのように飼料が無駄になっているかを考え、意識して取り組んでみましょう

①食いこぼしや無駄餌の防止のために

- **少量の餌を頻回給与**することで、食いこぼしを防止しましょう
- こまめに**餌槽内の掃き寄せ**を実施しましょう
- 牛が粗飼料を食べる際に牛房内に引っ張り込んでこぼすことのないよう、馬せん棒の高さを調整しましょう

一日の給与量を複数回に分けて給与し、食いこぼしの出ないようにしましょう

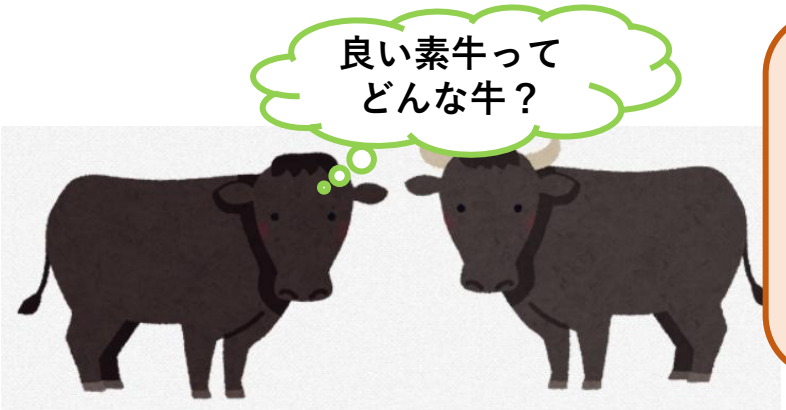
餌槽内の餌が散らかったら掃き寄せてあげましょう

引っ張り込んだ粗飼料は、脚で踏まれて糞と混ざりあうと、もう食しません

馬せん棒の高さは、少なくとも６０センチ（牛が乗り越える心配がなければそれ以上）あると良いでしょう

②飼料効率の向上のために

・**良い素牛**を選び、飼い直し期間を短くしましょう
・適期（導入直後）に粗飼料を多給し、しっかりした第一胃を作りましょう
・産肉生理論を基本に、血統や性別、肥育月齢にあわせて、最適な飼料を適量給与しましょう
・**餌槽及び水槽は毎日清掃**し、常に清潔な状態を保ちましょう

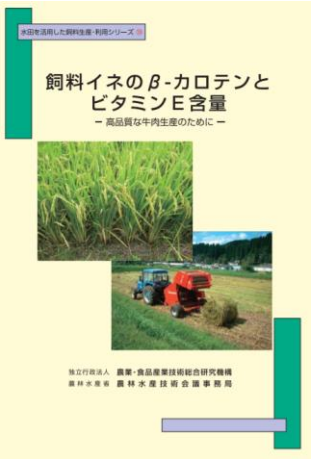


良い素牛の一例として、
・しっかり粗飼料を食い込んでおり、肋張りが良く、深みがある
・毛艶が良い
・尾枕がついていない
・角や蹄にストレスを受けたあと（年輪のような輪）がない
・陰毛に白色結石の付着がない等があります

コケが生えたり、汚れが浮いている水は、雑菌が繁殖し、腐敗しやすくなります。
牛がぐびぐび飲みたくなるように、毎日きれいに掃除しましょう。
暑い時期の暑熱対策としても大事です。

③自給粗飼料の活用

・田んぼへのすき込みや放置されている稲わらなど、**地域で生産された稲わらをできる限り確保**しましょう。
・肥育牛にWCS（飼料稲サイレージ）を給与する場合は、給与時期に注意しましょう（脂肪前駆細胞が分化する14～20ヶ月齢ごろの給与は避けましょう）
・WCSを収穫する際に、黄熟期の飼料稲を予乾してサイレージ調製することで、β-カロテン含量を低く調整できるという報告もあります（農研機構「飼料イネのβ-カロテンとビタミンＥ含量～高品質な牛肉生産のために～」参照）。**WCSを購入する際は、収穫ステージ及び予乾の有無などを確認しましょう**



④飼料タンクや餌の管理

・飼料にカビ等が生えないように、タンク内への雨水の流入等に注意しましょう

・暑熱期は飼料タンクにカバーを掛けるなど、**タンク内の温度上昇を防ぐ対策**をしましょう

・飼料タンクが空になるタイミングで、内部にこびりついた餌の塊をしっかり落としてから次の飼料を入れましょう

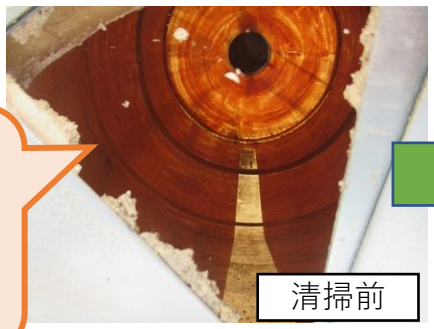
・濃厚飼料のまとめ買いや買い置きは、保管期間が長くなればなるほど品質低下のリスクがあります。できる限り必要な量をその都度購入することが望ましいですが、長期間保管する場合は保管する環境に充分留意しましょう。

・紙袋飼料や稲わら、乾草なども**雨等のあたらない屋根下や倉庫内で保管**しましょう

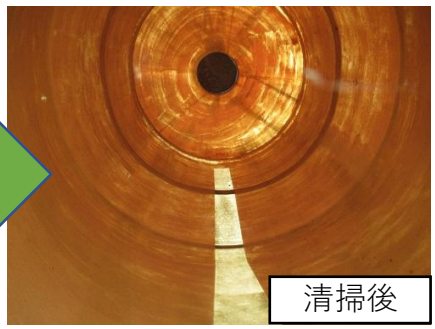
・紙袋飼料は、使用するたびに**しっかり封をしましょう**

暑い時期は、タンクの中も高温になり、中の餌が変質してしまいます。断熱シートで覆うなど、タンク内の温度上昇を防ぐ対策をしましょう。

残った餌の塊にカビが繁殖したり、その塊が原因で飼料搬送ラインが詰まることもあります。
可能ならタンク内を洗浄すると、なお良いでしょう。



清掃前



清掃後

粗飼料も濃厚飼料も、屋根下や室内など、雨のあたらない所で保管しましょう

ロールや飼料はパレットの上にのせて、下部の通気を確保しましょう。

使用途中の紙袋飼料は、開けっぱなしにせず、しっかり封をしましょう

⑤適正な体重で出荷

・出荷時期は牛を見て調整しましょう

・近年和牛の改良が進み、早く大きくなる牛も多く見られるため、早期出荷によりコストカットに努めましょう（次頁参照「R6年度宮崎県畜産試験場試験研究の取り組み」）

⑥その他の飼養管理

・カビの生えた餌は給与しないようにしましょう

・事故率低減のために、牛をしっかり観察し、疾病や異常行動の早期発見に努めましょう

・ＩＣＴ機器を活用し、牛の異常に早く気づいて対処できる環境を整えましょう

もったいないと思っても、カビの生えた飼料を給与してはいけません。堆肥に混ぜ込んで処理するか、ほ場に還元しましょう。

肥育牛に適したＩＣＴ機器の例として、牛の行動監視システムや、活動情報解析システム等があります。

問い合せ先窓口

【 中部地区 】	中部農業改良普及センター	０９８５－３０－６１２１
【南那珂地区】	南那珂農業改良普及センター	０９８７－２１－９５５０
【北諸県地区】	北諸県農業改良普及センター	０９８６－３８－１５５４
【西諸県地区】	西諸県農業改良普及センター	０９８４－２３－５１０５
【 児湯地区 】	児湯農業改良普及センター	０９８３－４３－２３１１
【東臼杵地区】	東臼杵南部農業改良普及センター	０９８２－６８－３１００
	東臼杵北部農業改良普及センター	０９８２－３２－３２１６
【西臼杵地区】	西臼杵農業改良普及センター	０９８２－７２－２１５８
【 県域 】	総合農業試験場専門技術センター	０９８５－４４－１６２０
	宮崎県畜産振興課	０９８５－２６－７１３８

畜産試験場

1　肉用牛肥育における早期出荷技術の開発

（1）試験研究の目的・背景

・　早期出荷技術は、肥育期間を短縮することで経営効率の向上（飼料費の低減や出荷頭数の増加）が期待される（図１）が、枝肉重量の低下等が懸念され、普及が進まない面も見受けられる。

・　収益性の確保を図るため、早期出荷技術を確立し、肥育経営の安定化を目指す。

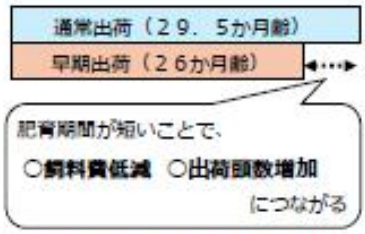


図１　早期出荷によるメリット

（2）これまでの成果

・　早期出荷（26か月齢）での枝肉重量の確保に向けた飼料給与体系の確立

〈試験概要〉

① 肥育前期における飼料中の粗タンパク質含量の強化

→ 筋肉が発達する段階での発育強化を目指す。

② 一日当たりの飼料給与量の増加

→ 肥育期間が短くなっても一定の枝肉重量の確保を目指す。

写真１　早期出荷試験牛

〈試験結果〉

① 肥育期間中の発育が向上

→通常出荷と比較して１日あたり0.05kg増加

② 一定の枝肉重量の確保

→通常出荷（499.9kg）と比較して13kg減少（2.6%減）に抑制

〈収益試算〉（表１）

① 肥育期間全体の飼料費

→通常出荷と比較して85,729円減少（17.2%減）

② １頭あたりの収益

→通常出荷と比較して2,018円増加（6.7%増）

③ 100頭規模の場合の試算

→年間出荷頭数は12頭増加、年間収益は約50万円増加

表１　収益試算（肥育開始9か月齢）　（1頭あたり）

		通常出荷モデル		早期出荷モデル
出荷月齢		29.5か月齢	3.5ヶ月短縮	26か月齢
費用 A		1,239,406	↓	1,125,004
	素畜費[1]	573,725	－	573,725
	飼料費[2]	497,741	↓	412,012
	その他[3]	167,940	↓	139,267
収入 B		1,269,325	↓	1,156,941
	枝肉価格[4] 枝肉単価[4] × 枝肉重量[5]	1,250,250 2,501円/kg × 499.9kg	↓	1,137,866 2,336円/kg × 487.1kg
	その他	19,075	－	19,075
差額 B-A		29,919	↑	31,937
100頭規模	年間出荷頭数	58 頭	↑	70 頭
	年間収益	1,735,302	50万円増加	2,235,590

[1](通・早)令和5年度宮崎県子牛セリ去勢平均価格
[2](通)農水省「畜産物生産費統計(R5)」(早)試験期間中(R5.7~R6.11)の飼料単価にて計算
[3](通)農水省「畜産物生産費統計(R5)」(早)肉用牛生産費を肥育期間で圧縮
[4](通)R5年度 宮崎県去勢肥育牛出荷成績 (早)試験牛の取引価格平均
[5](通)R5年度 宮崎県去勢肥育牛出荷成績 (早)試験牛枝肉重量平均

（3）今後の取組と成果見込み

・　各地域で早期出荷に取り組む生産者の現地調査を実施

・　行政・普及が連携した試験成果や取組事例を掲載した早期出荷マニュアルの作成及び普及

・　令和７年度から、新たに肥育開始月齢を早期化した試験に取り組む予定

写真２　現地調査